

あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.242 2022.12.15



新博物館の展示製作が完了しました

もくじ

特集	◇ 新博物館の展示製作が完了しました	2
誌上博物館	◇ 松本の線刻石像	4
博物館のノートから	◇ 馬場家住宅にあったもう一つの蔵を訪ねて	6
博物館TOPICS	◇ 企画展『図面でたどる松本高等学校 一大正から令和へ 講堂築100周年』	7
ガイドコーナー	◇ はんでんぼく	8

掲載されている各種事業は、新型コロナウイルスの感染状況などによって急遽中止となる場合がございます。開催の可否などについては、各館にお問い合わせください。

新博物館の展示製作が完了しました

この度、展示製作の現場設置が完了しました。
展示製作では主に、1階の子ども体験ひろばと導入展示エリア、
2階の特別展示室、3階の常設展示室を整備しました。
今回は、写真とともに出来たばかりの各エリアをご紹介します。



導入展示エリア

導入展示エリア

導入展示エリアでは、大名町の入口を入ると、大きな吹き抜け空間が現れます。ガラス張りのこの空間には、今年のワークショップで市民が制作したてまりを使った「松本てまりモビール」を設置しました。壁面にはイラストマップとタッチパネルモニターを設置し、階段ベンチの向かいではガイダンス映像を放映します。また、松本てまりモビールを眺めながら3階に上がると、イラスト年表が設置されています。導入展示エリアでは、気軽に「松本ってどんなところ」かを知ることができます。

子ども体験ひろば

子ども体験ひろばは、小学生までのお子さんが、保護者と一緒に過ごす体験の部屋です。ここでは多様なアイテムにとにかく触れて、遊びのなかから発見の喜びを感じることができます。松本タウンマップは、松本市のイラストマップを舞台に、積み木や車のおもちゃを自由に動かして遊びながら自分だけのまちをつかっていくアイテムです。松本の里山をイメージした壁面イラストでは、背比べをして動物たちの大きさを体感できます。ほかに、音を聞く・匂いのかぐなどの五感を使った体験アイテムを設置しました。自由な体験と遊びの場であることから、部屋の愛称を「子ども体験ひろば!アソビバ」としました。



子ども体験ひろば

特別展示室

特別展示室では、大きな壁面ケースと可動式の展示ケースを製作しました。壁面ケースは、高さ2.5 m、長さ25 mもあり、様々な展覧会に対応可能です。すべての展示ケースが国宝や重要文化財を展示できる気密性能を備えています。開館後は、他の博物館・美術館の貴重なコレクションを借用した特別展を定期的に開催していく予定です。



特別展示室

常設展示室



常設展示室

常設展示室は、過去から現在へと時代順に展開する通史展示ではなく、松本の特徴的なテーマを深める「テーマ展示」としました。松本城下町ジオラマを設置する「お城のあるまち」、江戸時代の初市（現在のあめ市）の様子を壁面イラストで表現した「にぎわう商都」、松本市を囲む山並みを立体で体感する「ともにある山」の各テーマは、ダイナミックな造作による空間演出が特徴です。その他のテーマは、定型的なシステム什器^{じゅうき}を配置し、展示資料にじっくりと向き合う空間としつつ、容易な展示替えを可能としました。

市域全体を「屋根のない博物館」と捉え、現地にある歴史・文化・自然・産業、そして人々の営みのすべてを「松本の宝」とする『松本まるごと博物館構想』。新博物館は、『松本まるごと博物館』の基幹施設として整備を進めてきました。従来のような博物館の収蔵資料を紹介するだけでなく、魅力あふれる松本のフィールドが感じられる展示空間にするため、市内各地で多くの方にお話を伺

い資料等の提供をいただきました。ご協力いただいた皆様に改めて感謝いたします。

今後は、資料の搬入や照明・空調の調整などの細かい作業を行いながら、効果的な案内方法などを検討し令和5年10月の開館に向け準備を進めていきます。

(松本市立博物館 学芸員 / 千賀康孝)

松本の線刻石像

はじめに

松本市の石造文化財のうち、舟型光背等のレリーフ像や立体的な丸彫像が作り始められるのは、天正3年(1575)の銘を刻む専称寺の地蔵菩薩等一部の例を除けば、寛文9年(1669)の放光庵の地蔵菩薩とみていいでしょう。その後、元禄年間からその数が増加していきませんが、ちょうどこのころまで、こうした立体的な石像に先立って、線刻技法による石像が市の西部に散見されます。その数、28基を確認しました。和田地区等、現地調査ができていない物件もありますが、本稿では、これらの線刻石像について考えてみます。

1 波田の線刻石像

最古の事例は、上波田阿弥陀堂の前にある閻魔王像です。天正2年7月に越前の経聖が造立したと刻まれています。道服に身を包み、ひげを蓄えた勇ましい姿をしています。これに続くのがちょうど半世紀後、寛永12年(1624)6月の銘を刻む盛泉寺の六地蔵です。向かって左から、合掌、幢幡、鉢、柄香炉、錫杖と宝珠、花筥の順と思われ、いずれも円光を負っています。造形は稚拙で、柄香炉と花筥は立体感に欠けます。盛泉寺の境内には、ほかに一石六地蔵があります。上部に「佛法僧」の3文字が刻まれ、極限まで省略された6軀の地蔵菩薩は愛らしく、人気があります。

以上のように古い線刻石像はいずれも波田にあり、これに続くものとして、中波田の庚申塔があります。中央に円光を負う4臂の青面金剛が二童子と二鶏を従えています。元禄3年(1690)の造立で、盛泉寺の六地蔵から60年余りが経過していますが、どこか共通した点があるように感じられます。元禄年間になると、他の地区にも線刻像が見られるようになります。



上波田阿弥陀堂の閻魔王

2 今井の仁王塚

今井には10基の線刻石像と9基の文字碑からなる、仁王塚と呼ばれる遺構があります。線刻石像自体には銘はありませんが、「南無阿弥陀佛」と刻まれた碑に寛文12年の銘が刻まれており、このころの造立と考えられます。

仁王般若経による立体曼荼羅は東寺固有のもので、金剛界の五菩薩という特別な仏像をあてているそうです。今井の仁王塚では、遺構奥に並ぶ文字碑が示すように、五智如来をあてています。中央の基壇上に大日如来に比定する三重塔を立て、東に阿闍如来、南に宝生如来、西に阿弥陀如来、北に釈迦如来を配すところですが、今井では儀軌とは違っているようです。東には阿闍如来と同等とされる薬師如来が、南には宝生如来に変わって観音が、北には釈迦如来に変わって地蔵菩薩が置かれています。地蔵菩薩はお釈迦様がなくなってから56億7千万年後に弥勒菩薩が現れるまでの間、衆生を救うとされているので代わりに置かれたのでしょうか、南に観音が置かれた理由はわかりません。

さらに、基壇上に日輪月輪、入口の左右に獅子・狛犬と左近衛中将・右近衛少将を配するという念の入れようです。流れるような柔らかな線が特徴で、波田の直線を主体とした作品とは一線を画するものと思われます。



今井仁王塚の右近衛少将

3 元禄年間の線刻石像

中波田の青面金剛と同じ元禄3年に造られた線刻石像が笹賀の小俣観音堂に2軀あります。一つは二童子と二鶏を従えた4臂の青面金剛で、中波田と同じ構成ながら、作風は大きく異なり、直線的で稚拙な技法ですが、どこか大陸的な印象を受けます。もう一つは「奉納西国三十三番」と刻まれた巡礼塔で、合掌する菩薩像が彫られています。合掌の手の造形等から青面金剛とは作者が異なるように見受けられます。

神林水代には元禄10年の銘がある如意輪観音があります。とてもかわいらしい造形で、昔から拓本家に人気があります。「念佛講女二十一人」と刻まれ、女性で構成される念仏講が造立したことがわかります。水代には筒井氏の阿弥陀堂があり、「奇妙立像」というおかしな名前の仏像が祀られています。これは、念来寺を開いた長音上人の師、念来称帰命山但唱阿弥陀仏を法号とする但唱上人の像と思われます。常念仏を旨とする弾誓派の影響を受けているとすれば、早くから念仏講が組織されていて不思議ではありません。



神林水代の如意輪観音

また、隣の塩尻市洗馬の心念堂の境内に、元禄11年の銘を刻んだ青面金剛があります。宝剣と法輪をバットとボールに見立てて、少年たちから野球の神様と呼ばれているそうです。この像もかわいらしく、拓本家に人気の石像です。どこか水代の石像と通じるものがあるように思われます。

4 晩年期の線刻石像

今井の宝輪寺に、正徳5年(1715)と享保3年(1718)の銘を刻んだ、2軀のよく似た合掌する菩薩像があります。お寺の裏側の駐車場の一角に、お寺の墓地があり、その南側に、半ば地中に埋もれるような形で存在します。享保3年の石像の頭頂部をよく見ると、馬の顔のようなものが彫られており、こちらは馬頭観音のようです。刻ま



今井宝輪寺の聖観音

れているのは造立年だけなので、誰が何のために造ったのかはわかりません。

この場所にはこれら2軀の線刻石像のほかにも、ユニークな石像があります。そのうちの一つは、線刻石像に先立つ元禄3年に造立された半肉彫の合掌する菩薩像で

すが、この像が後の線刻石像に影響を与えたのではないかと思われるほど意匠が実によく似ています。もう一つは宝暦2年(1752)の銘のある聖観音で、頭部は半肉彫ですが、胴部は立体になり切れておらず線刻に近い技法を残しています。

まとめに代えて

松本市域の石像の歴史は城下町及びその東側と、西部では異なるようです。また、四賀地区と奈川地区はこれらの地域と異なる歴史があります。

玄向寺の水野家廟所には寛文9年の銘がある石の鳥居があります。同じ年に放光庵の地藏菩薩が造立されていますが、そこには施主として「生国相州根布川廣井作次兵衛」という人物の名が刻まれています。根府川の廣井家は北条氏の家臣の時代から採石の仕事を探り、江戸時代に町人となってからも代々長十郎を名乗り、採石御用の職にありました。寛文8年に鶴岡八幡宮に大きな石鳥居を建立しており、その実績を買われて次男が松本に招聘されたのでしょうか。廟所の鳥居も放光庵の地藏も石材はホリガサ、すなわち入山辺の堀が沢から切り出された石です。石造物に適した石の見立ても、廣井作次兵衛が請け負ったのでしょうか。放光庵の地藏菩薩は、殿さまの廟所の鳥居が無事に完成できるように願って刻まれたものと思います。

貞享4年(1687)には、町人によって雇用された石工が、入山辺の中入村で働いていた記録があります。この石工は藤沢村の出身で、いわゆる高遠石工です。水野家の廟所が無事竣工し、雇止めになった石工たちではないでしょうか。こうして城下町及び東部の立体的な石像づくりが始まったようです。

西部でも、立体的な石像が作り始められるのは元禄ごろのようです。今井の宝輪寺には先の菩薩像のほかに元禄3年の青面金剛があり、神林の如意輪観音の隣にも同年に造立された青面金剛が、中波田の青面金剛の横にも同年の青面金剛があります。

そして、西部にはこれらの立体的な石像に先立ち、線刻という技法による石像があるのです。その期間は100年以上にわたります。閻魔王をはじめとする波田の石像には若澤寺との関係がありそうです。また、他の神林、笹賀、今井は幕府領だったので、これらの地区にある石像が、廃仏毀釈で他の地区から移動してきた可能性についても検証する必要があります。

(松本市立博物館 館長/木下守)

馬場家住宅にあったもう一つの蔵を訪ねて

はじめに

重要文化財馬場家住宅で11月まで開催した「馬場家所蔵品展」では、所蔵品の他に馬場家住宅の蔵を取り上げました。馬場家住宅には、主に重要書類や家財を保管した「文庫蔵」と、食料を保存した「奥蔵」が現存しています。外観や収蔵物は異なるものの、「モノを保存する」機能を担う蔵は、伝来品の姿をもってその役割を示しました。

ところで、馬場家では、馬場家住宅にあった蔵が縁者の家に移築されて残っていると伝わっています。当館で展示している明治28年(1895)当時の馬場家住宅全体を描いた「家相図」でも、文庫蔵の北隣に「蔵」と書かれた建造物が確認できます。ここにはどのような蔵があったのか。かつて存在したという蔵の姿を見に行きました。



家相図より一部抜粋。
左下の建造物が移築されたという蔵。

1 板蔵訪問

令和4年(2022)8月。私は、高島城にほど近い諏訪市の井上家を訪ねました。井上家は、現馬場家当主である馬場太郎氏の生家です。医者であり実業家でもあった太郎氏の父・井上徳次郎氏は、馬場家から妻を迎えており、馬場家を強力に支えたといえます。井上家現当主の井上昭子氏に案内いただき、敷地内を進むと、庭に面した一角に「板蔵」と呼ばれる建造物がありました。

板蔵は、徳次郎氏が移築したものです。移築時期は昭和10年(1935)前後と考えられています。移築後は、住居としても利用されたため、窓ガラスやベランダなど改修の様子が見て取れました。また、家相図には、板蔵に附属屋が描かれていますが、これは確認できませんでした。一方、外壁に使われている



井上家に残る「板蔵」

る古びた板材、約90cmの短い間隔で入る柱、建物から屋根部分を独立させた「置き屋根」などは、板蔵の名

前を想起させる様子を今に残していました。

2 板蔵について

板蔵について判明していることは限られており、建築年代も家相図作成以前としかわかりません。ただ、馬場家の古文書に、安政4年(1857)以前の屋敷を描いたと推定される絵図があり、そこには文庫蔵の隣に「味噌部屋」と書かれた建造物が見られます⁽¹⁾。

また、「以前は中庭にもう一棟の土蔵があり、そこには馬場家が檀徒総代を勤めた牛伏寺の年貢米が納められていたといわれる」という太郎氏の話があります⁽²⁾。「味噌部屋」と合わせ、板蔵は食料の貯蔵に用いられていたと推測されます。

おわりに

井上家訪問後、私は、家相図を基に板蔵の建築位置を確認してみました。現在庭になっている文庫蔵の北側を見ていくと、低い石垣や石段の場所が、板蔵の形状と符合し、その存在を実感できました。そして、外観の異なる三つの蔵を想像し、この屋敷で営まれた生活の多様さを改めて感じました。

板蔵の他にも、家相図には今はない建造物が複数描かれています。馬場家住宅にお越しの際は、かつてあった建造物にも注目してみてください。



馬場家住宅における板蔵の推定位置

執筆にあたり、馬場啓治氏、井上昭子氏に多大なご協力を賜りました。厚く御礼を申し上げます。

(重要文化財馬場家住宅 主任/宮下慶祐)

(注)

(1)服部亜由美「馬場家の屋敷周辺絵図」(『馬場家研究報告2018』(平成31年):1-4)

(2)大河直射「民俗に関する調査」(『緑に囲まれた歴史的居住環境の保存と利活用に関するモデル計画の研究』(昭和63年):44)

企画展 『図面でたどる松本高等学校 —大正から令和へ 講堂築 100 周年—』

大正8年(1919)4月に松本高等学校が開校しました。大正11年松本高等学校の講堂・図書館が完成し、落成記念式典が行われてから、今年で100周年を迎えました。



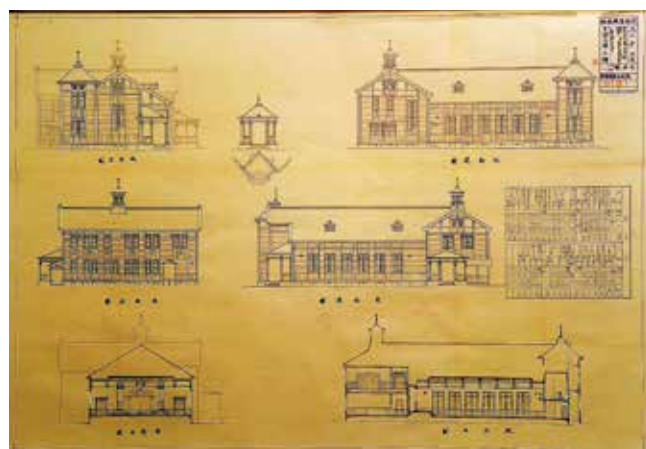
落成記念帖(1922年)
旧制松本高等学校の校舎落成を記念して作られた写真アルバム。巻頭には、松本中学(現:松本深志高等学校)の校舎を間借りしていた開校当初からの念願であった新校舎完成の喜びが記されている。1枚目には「日本アルプス」の写真が収められており、信州全体をキャンパスとみなしていたことがうかがえる。



大正11年(1922年)の講堂の写真
完成間近な講堂の写真。南西面(正面入口側)からの撮影。講堂を施工したのは、県内の建築会社「守谷商会」(大正5年創業、長野県長野市)。

明治・大正期に全国各地に作られた旧制高等学校の多くは、現在旧校舎が残されていません。松本高等学校の本校舎と講堂は、当時の状態のまま現存している大変貴重な建物で、国の重要文化財に指定されています。講堂は洋風木造で、明治前期の官立学校の主要建物には煉瓦造りが多いですが、その後、大正の中頃までは洋風木造建築が大半を占めます。これは明治24年(1891)濃尾地震で煉瓦造建物の被害が甚大であったためと言われています。アメリカで発達した「スティック・スタイル」と呼ばれる木造の建築様式を用いて、柱と横材を表に現し、壁は洋風の羽目板を貼っ

ています。全体的に重厚さよりも軽快さに富んだ様式ですが、この様式はこの時期の官公庁や学校でも多く用いられました。現在の学校建築では専用の講堂が建てられることは少なく、体育館などを利用することが多くなっていますが、大正時代に入ると、祝祭日の式典や市民の交流の催しを行う施設として、講堂が盛んに建てられるようになりました。本企画展では、大正デモクラシーの思想を反映した建物を当時の図面とともに振り返ります。



講堂の図面
講堂兼図書館の当初図面で、全18枚の内第3号。縮尺二十分の一の建図。建図は現在の立面図のことで、東西南北各方向から見た外観を描いている。松本の後に括弧書きで「第九」とあり、当時文部省で松本光津学校が9番目の高等学校として認識されていたことが分かる。

(旧制高等学校記念館 学芸員 / 高山峻一)



本展示の様子

企画展 『図面でたどる松本高等学校
—大正から令和へ 講堂築 100 周年—』

- [会 期] 令和4年11月12日㊤～令和5年1月15日㊤
- [会 場] 旧制高等学校記念館 1階ギャラリー
- [料 金] 入場無料
- [主 催] 信州大学附属図書館・大学史資料センター・旧制高等学校記念館

みゅーじあむショップ通信

時計博物館 オリジナル商品 “懐中時計”

今回は当館オリジナル商品の懐中時計を紹介します。日本では明治12年に初めて生産されてから、昭和時代にかけて多くの人々に愛用されました。今では若者を中心に時計離れが進んでいますが、だからこそロマンが感じられます。スマートフォンなどにはないファッション性やこだわりのある懐中時計をぜひお求めください。

販売中の懐中時計（ゴールドとシルバーの2色）



展示スケジュール

詳細はホームページへ! <https://www.matsu-haku.com/> まる博 検索

館名称	12月	令和5年(2023)1月	2月
旧制高等学校記念館	■「図面でたどる松本高等学校 一大正から令和へ 講堂築100周年」 11/12(土)～2023/1/15(日)		
松本市時計博物館	■あめ市歴史展示「塩の道とあめ市のはじまり」 2023/1/4(水)～29(日)		
重要文化財馬場家住宅	■「松本平の御柱展」 12/10(土)～2023/1/22(日)		
その他	■速報展「発掘された松本2022」 2023/2/11(土)～2/26(日) ※詳細は下記の「考古博物館から」をご覧ください。		

※料金は通常観覧料 ※月曜休館(休日の場合は翌平日)

旧山辺学校校舎から

☎0263-32-7602

第2回探古会(古文書読解講座)

日時 令和5年2月26日(日)午前9時～正午
会場 松本市教育文化センター3階 視聴覚ホール
料金 500円(テキスト代として)
定員 40人(要予約・先着順)
対象 どなたでも
講師 後藤芳孝氏/まつもと文化遺産保存活用協議会会長
持ち物 筆記用具、飲み物(必要な方)
申込み 令和5年2月11日(土)午前9時から電話で旧山辺学校校舎へ

考古博物館から

☎0263-86-4710

発掘された松本2022 速報展

令和4年に松本市内で実施した発掘調査等について、出土品や写真を展示し、その成果をいち早くご紹介します。
会期 令和5年2月11日(土・祝)～26日(日) ※月曜休館
会場 時計博物館3階 企画展示室
料金 時計博物館の通常観覧料(高校生以上310円、小人150円)

松本市遺跡発掘報告会

日時 令和5年2月11日(土・祝) 午後1時～4時
会場 Mウイング 6階ホール
料金 無料
定員 120人(要予約・先着順)
申込み・ 令和5年1月31日(火)午前9時から電話で文化財課
問合せ 埋蔵文化財担当へ TEL:0263-85-7064

窪田空穂記念館から

☎0263-48-3440

百人一首教室

窪田空穂生家を会場に百人一首教室を開きます。
日時 令和4年12月10日(土)、12月17日(土)
令和5年1月14日(土)
いずれも午後1時～3時
会場 窪田空穂生家(窪田空穂記念館向かい側)
料金 無料
定員 各約20人(要予約)
対象 小中高校生
指導者 中山巖氏
申込み 電話で窪田空穂記念館まで(当日受付も可)
その他 送り迎えは保護者が責任をもってお願いします。

冬季文化講座「冬日ざし」

①「窪田空穂と和田堰」 ②「松本の武士の暮らし」
③「生家であったかコンサート」 ④「窪田空穂と植村正久」
窪田空穂の歌集「冬日ざし」から名付けた冬季文化講座です。
日時 ①令和5年2月4日(土)、②2月11日(土)
③2月18日(土)、④2月25日(土)
いずれも午後1時30分～3時
会場 窪田空穂生家(窪田空穂記念館向かい側)
料金 無料
定員 各20人(要予約・先着順)
講師 ①上條宏之氏/前長野県短期大学学長
②後藤芳孝氏/まつもと文化遺産保存活用協議会会長
③嘉納雅彦氏/チェロ奏者
④大澤秀夫氏/鈴蘭幼稚園理事長
申込み 令和5年1月6日(金)午前9時から電話で窪田空穂記念館へ

あとがき

令和5年10月の新博物館開館まで、とうとう1年を切りました。展示作業に収蔵資料の整理、イベント企画など、開館に向けて着々と準備が進められています。万全の状態でご様をお迎えできるよう、寒さに負けず頑張ります!

(松本市立博物館 吉澤せり子)

あなたと博物館 No.242

発行年月日/令和4年12月15日
編集・発行/松本市立博物館
〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133
URL: <https://www.matsu-haku.com/>
e-mail: mcmuse@city.matsumoto.lg.jp



印刷 川越印刷株式会社